



會稽三浦響

貳

~ 13
3114
2



明 へ 13
3114
2

會日秬三浦御言

會日三浦御言卷之二

浪速 濱松氏助 著



衣竹立 出陣

高木よそ



井 野

かしか
十 紀 伊

如斯に不ふ三浦大助美明ハ大坊小悦比施行書の奥小領掌
の澄じて姓名を書記さんと筆を採りてお土坊やめて卒忽の
父上血筋の傳ふ人ハ一味同心遠背有はけまとも妻の縁
の入べき所小あらしむと制らむか詞の端々聞ゆる悟きら面々即
重忠祇小威美な在後ひて大助小打向ひ今日御祝後子鶴万喜
目出たぐ納たる最早御職たまらえんを立上るゝ大助呼ぶ

三浦御言卷之二

能く呼ひつらうまき所幸と乗合せまう座と立破る使者へ
 と盧外祖、又少不礼かうどお以の外の苦氣なりとて死なれと
 重忠ハ見向たもやらひ只魚外不礼も御免おれし捨又もあ
 いづか美盛あうと向あ小ぬさうとまつ侍て重忠儀小座を立
 破ふ心恋祖父老眼小て見さるも有べき美盛ハ其頬で
 見て取たつ四も五もいじ三浦一家小同意して佐殿の御味方に
 まわらう参らぬたつ二口小返答聞ん落りおたると重忠あつとも
 駭うして一口の返答と望まきて長こといふまほ父富山庄司重
 能大番のち在京して平家小宮仕の苗主のうもに佐殿謀叛の
 色と影もあへて父の所存も知らひて源氏の味方おもひつ次
 うに記処小長居も詮りたの多難久ふと行と引らぬ大美小親在
 も救又敵味方と別る復も勇者の常にて珍匠くは親を
 子と子足下の心と源氏小つくる平家小つくるいふく問かき
 美盛の不孝者身体はは皆親の受たる重忠我儀小一了皆
 をあまきばあえぬは屋の美小よつて一旦源氏に味方と
 父重能平家小従も忠と孝小も重ねて平家小祖も必
 必定終まは佐殿小も二心あか重忠を味方小加へたまふ言や
 有べたまはと詞を放ちてあつとも動せぬ理義の生長後小四礼を
 悟じも実理の事と知られたる物小あえぬ血氣の美盛尤あまは
 今日只今とて敵味方と相成る王房小いとは違ひ縁
 を切らるる此座立せしと勢い込へてせり立まは重忠居た高

能く呼ひつらうまき所幸と乗合せまう座と立破る使者へ
 と盧外祖、又少不礼かうどお以の外の苦氣なりとて死なれと
 重忠ハ見向たもやらひ只魚外不礼も御免おれし捨又もあ
 いづか美盛あうと向あ小ぬさうとまつ侍て重忠儀小座を立
 破ふ心恋祖父老眼小て見さるも有べき美盛ハ其頬で
 見て取たつ四も五もいじ三浦一家小同意して佐殿の御味方に
 まわらう参らぬたつ二口小返答聞ん落りおたると重忠あつとも
 駭うして一口の返答と望まきて長こといふまほ父富山庄司重
 能大番のち在京して平家小宮仕の苗主のうもに佐殿謀叛の
 色と影もあへて父の所存も知らひて源氏の味方おもひつ次
 うに記処小長居も詮りたの多難久ふと行と引らぬ大美小親在
 も救又敵味方と別る復も勇者の常にて珍匠くは親を
 子と子足下の心と源氏小つくる平家小つくるいふく問かき
 美盛の不孝者身体はは皆親の受たる重忠我儀小一了皆
 をあまきばあえぬは屋の美小よつて一旦源氏に味方と
 父重能平家小従も忠と孝小も重ねて平家小祖も必
 必定終まは佐殿小も二心あか重忠を味方小加へたまふ言や
 有べたまはと詞を放ちてあつとも動せぬ理義の生長後小四礼を
 悟じも実理の事と知られたる物小あえぬ血氣の美盛尤あまは
 今日只今とて敵味方と相成る王房小いとは違ひ縁
 を切らるる此座立せしと勢い込へてせり立まは重忠居た高

小方のほどまき盛親と親と手解約してわたりたふ妻女重忠の
 我儘小去支さうび但々聳男の縁を結ハ三浦の鉾先は持心
 なるふる彫心なるふる交おじや去来立飯ふといひ捨て出行く重忠
 飯さじと大太刀多抜き打掛ま心得たると抜合せ両方年々相生
 の負さき芳らぬ大刀捌き豆小箱を削る音胸小寄せてかけ出と女
 帯と扣てとむる親御使者のかきま交なすは輕朝云への中分祖父
 も構ひぬくと動せもせは見向もやらは振ふる拳の冷汗と艱志めたる
 血汐のわらふまは懸つたへ赤くなり又青くなふ面色小強まを見を
 てあるへたるも未勝負も見さるふ徹小人馬の駭く音大濤の寄来ふ
 おやくと血の切先自然とたふして見へたる所小別當義隆三郎義成十
 郎義連次郎義持を初め皆々腹巻小身を固め庭上小大音わけ

やあく義盛相傳の玉君不頼まは天夏の前のおま小暮る私のお働
 たる卒忽千萬重忠一人の身たるも勝へき軍と願ふもあはらば
 心の併小飯ら飯らせ汝は速く出陣の用意せよと叫つけ昨夜御義
 兵を圍ひひじく一門残らぬ心と合せ三千余騎御加勢の手配り思
 ひの併只今出陣仕ふ夜前かくと御耳不達しる百六歳の御秘決
 よう余所小なる人も本意さく存り却て御心小肖た段真平御免下さふ
 べし速御暇と有けまは大助悦ひ膝を打て出来じたるといはほし今
 御味方小参ふ一門思ハ武運小叶たると平家の運ハ端でかけ源
 氏の運ハ缺て満軍の勝利疑ひは一方一具加つたるく人首とさる
 て未来の供生て飯らの不孝そと教ゆふ詞小忠ある義あは禮を
 尽して立飯ふ使者の行道信の道孝と守つて重忠ハ鏡武者の

和州府内山崎

富山重忠



和田義盛



和田義盛
おつら
富山
重忠と
諱

昔年三月廿二日

登居ふ中おめと億せに立出まきと多もやめひ人きび磨地あひさ
弓取の誓眼小頸をまて別まへ小成小けふ

○山路夢

吹風小迷ふ深山の夜の道露小鏡の袖と濡らしつ遠小りよくと
急なうけ後室さほ著るひね鏡小身重し州摺とやらにて膝をうち
急ぐとまるとも退付つねたるとおし小似合さるか足りや静小おひひ
たまひまや女小姓二人の介抱す小取も三浦大助が娘ともいふ身
少て子や孫を軍小たていふ小案じら身ごと年若き者の退付つ
ねふ程急ぐとも我身小斐ねと心が足る急ぐともあを最早せは
こまひと言へとせらるる谷川の苔の下行水の音もきても未小あは
るを夜道の力草露小こたて暮ひゆくと小や鏡を出て其
い達よとがら石橋山孫も龍とらと子も龍不其言信をわの尸の
待小甲斐多し便り多し思ひ乱るる白敷小鏡の懸巻もいと志免腹
巻とつて肩ふりけいゆとめて伸腰の歩も苦く行脚も雑刀杖小
つくと人間世を観とら物とて軍のなまひ小て強きが勝も定ま
らひ勝も負も運小寄ふ夫を思へ巻小角小せ肉小地物堂社
をば死物い出陣の笛主にじ懶き夏の敷く積りて地腹痛
む頭のみ喙坂今越ふ身の療治小茶湯のまも何やひ真田の
与市初陣小名あり敵と組打日本一の高名と聞かへるも社
の葉か不行先小里の名の平家亡ひて一統小源氏の御世の
いと君の出世を待くも乾けふ民の水炊川潤小空や天も下り
も孫も佐殿小思ひも思ひまのとも同気同類相と心龍女

只雲起り席うそむけ風騒ぐ時も相合寅の刻構りて
 山麓一村あらん吹降小隠を家とて嵐小つきて市くと
 ゆふの寝小有との知そつや去なう待暫一歌の方より
 名あり阿佐利と市金子と市味方あり又三浦と市板の
 田の市りり夫と姉や足軽と雨小濡き又父の根小の
 まて峯よ谷よと立別き彼方う這方うと尋ねまばあそ山
 彦の枝うと枝小言信て葉末と渡子風の音小いと気づい
 己思ひを寒山の雲小あめませ紅渡朝の袖を枝うと
 とと誰ふと土肥の楊山小尋ね迷ふと見はる見傳は林の
 て枕小音く礎の音小眠を覚て四辺を見廻一儲は少てあ
 け家よなまつてけうる小目小りあ涙小き記立て歌
 歎くあまの女小姓傍小立ちゆ梅ささるはく勞うと
 後家傳小起直己まき見たる夢のさゆ語うと夏を
 女も聞てた伏殿ハ三代相傳の主君御も小加り小親子の
 小取の誓討死てもひう長き別ま小も成たうとを案
 小て更への後孫の真田ハ初陣といひ殊小大病の後あ
 返へせざるあおとさハ取ざるふの名をわ下さんうと思
 小も家を出し其間うと夜の目も合と案一勞世一人の
 かう二人の者をつきて石塔山へ尋ゆ夜の道雨小あひ
 与市とい色耳よのふらと谷よ峯よと子宿て尋ね流
 心小町の詠哥小引うて尋ね逢ふ轉寤の夢て又物に
 家来文藏小討と討あとも便をよと言討それ今小音

しほ路ひて案とふ思ひをく候真田の残と答ふれどもさう
を有難く悦び勇て御供とせしよく主人矢切ふりのぞ
心得て皆し奉公大古又小段「嗚呼待遠やつくるも此春の
日け長きや也待間もしほ」投首し遂絶て見ふおれお道理は
わし身に懸らぬ下くはても打志は貫きて氣をそつしける如
断ふ所へ家来文蔵只飯了候と案内少りきて直小通ふ平日
の一間やま戻しう待並たる今今に早ふ悔と古又もいまの
軍の勝負、いづと味方れ衆中小却怪我らま、其方が無事ふ
戻らふ親子の身け上恙はと安堵せら初陣の与市かあ
萬刻時や其方の世話うん候やよくそ戻り呉て細代を
のかはし從鯉の淵小踊ふまくとて勇之悦ひ向結らきた

をつくとはりふていれ真田敵少討死とも指當ふ老人の多けき
を察してはじうつむきて居たるけをき文蔵も休ませよとい言
るはども年寄の氣が奇ち後までを待並ふ石橋山の軍の次
弟孫子が手柄も有る語り聞せて呉は草臥らん小太後
かつと急うされて是非も今見ふおとく語りける

○軍物語

かくて兵備休戦朝公八牧判官並高を夜軍小討勝とく小
段小嶋を打立土肥の摺山石橋山の要害より所るは城郭
を搦へる付後小人くお北条敵土肥敵父子土屋敵田代との
戦ふ御方御親子を宗徒の兵ひて御勢は三百余騎より平
家の勢の三千余騎小競ふは十方が一なりども君の御運と人の心

と揃ひく物物の数としは強を以て改小合戦を初まらたは初夜
 軍小るは組手、誰と定りし源氏の方より真田小續剛の
 者も有はと評定あり時小取ての言まらんとやせし御大病
 の後より何れも肝を冷たしつ小勝色其日の出立精好の大
 口赤地の錦の直垂を君よりありて召きたる楊梅桜梨の丸
 右の小手白檀之が丸の脚當緋絨のりも立むるもの鎧小一尺三
 寸俵ひ較袴巻の打刀金作りの家重代刺を長小びまびけ
 二十四さいも深羽の矢除手お藤の弓持て鶯といふ名はお名
 馬小ひくると打棄て木戸押開を出たまふ頃如月二十日おま
 の宵割小敵間近く素多といふ目お腫の草のりも峯の嵐小誘
 をまきて山櫻を音信と大丈夫の志は影も影も取きて忍小隈

多く出る月影といふ古奇れ心小似たるぞや土肥の高根を
 出る月小甲の鉄形のむらむらといふあふ小を猶称増小花わり
 なると板平家のい真田を討んとて坂東小隠をるは辰野五郎景
 久長尾新五新六兄弟三人撰を出さきたる中おも辰野を力
 勝つて手利の大兵太山のおとく出立て日暮といふ名馬小吾身
 程げ小閃つと乗つと五尺三寸の大刀真田小抜かば長尾小勝を
 てかけ合せ其間近くなつと久二打三打、打ぞと見えてつと
 組ん最と馬の上めてむとと細雨馬が向へ臺と落ととる雑所
 の足場より環小端るく又ハ板屋の霰のおとくえ、おと刻きは
 こころくく互小樽びつと處ハ辰野ぞう入小成たかけ分とるも
 が勝つとの市とのえいんと刻返さう入る辰野を取ておと

身を髪を爪あけ首をかけしむかきとあふ不思議と雲も
小振あけて刀とまつと見たまへ八貫小降たる春雨小敷朝暮の
鯉口つまると執ながる栗くしり多て見へたけふ口小く入て
へかを初陣としし御若氣振上げて冠の板小押當丁ととあ
板をせ目釘元とつと折き波うち際小さつと入ふ懼も栗
させぬ所小長尾新五新六落合見まむ武者二騎組んでの
さ六圍く分うねて上う朕野下う朕野上こそ朕野下こそ朕野
いれ殺こそ殺こそと語ふも聞もあくと心を苦しめ氣をのみあけ
まそく點と聞せて呉きと市小怪我なうじつと向告らまて法方も
るくやもあふた吉かかろ後小長尾手小懸て若旦那御最期
の語りもあふと泣入を何らよと市討はじりまはるる不初ま

身をう記つり伏せりあふかき泣あへ有あふ女も一同小を川や
叫ひて泣涙袖小飾のそ落瀧津置小淵まじばりたるを良あつて
涙をとめめひやをまき文蔵主を討せて其敵も討やう立敵ふ不
見者祖母が未練小取乱れ歎けと笑えも恥けまじい聞とま
く岡武士の家小産を主君の先達の御役小立坂東一の勇者小
纏て命を落とせ我孫ハ通の果報者討死を悔み歎くやうるふ大の
祖母小てあふ孫ども不便せめて人ら記者を付添せるハ道ふ
吉も有言と悔しう悲しいそんがうらま今らうらま主小あふ家来て
は早く部を立退へと言捨おこ入たまふ文蔵やまき裾を
らて引留め是ハ情多記御仰思まらぐら殿と一所小養育小頭
と所詮手足の御役小立ととも命の御用小ひく立かねは



真田文藏因安



真田文藏館在
運七家

昔時三浦島美三

御覽まきき勿体なや御家の苗氏をゆりや山より高く海より
深き御恩を家記たふ真田文蔵国安右且那の御最期と知
ふらふ幾何どの命を生んとて死を志して逃れふべき手ハ
山馬手ハ海寄るくは雨を降し其入道狭き石橋山口割き召
の馬矢叫び小駑た心け併小うけ出其間を敵小取切らま御最期
知らぬ文蔵が武運のつた最期まで召きたま御肌着を記念小
見せ奉まきと大旦那の御點かかくとて立解つて後御怒りハ
去夏なう主従の御縁たふ悲しく骨を拉き身を碎くとも
此上の有へたをめて御門を守つてゐるとも御恩あふ王家の奉
只をせむむ御情の程女中達も宜しく執成たのこ入こおほく
涙を押し拭ひて色をはく小託泣きとわつ過て無愁なるそ身

其心ゆく隙くし記念の衣を持取祖母小見せよと岡崎の
此御使下く小ても相済ま着且那の討死跡小御力も有はと岡崎
の傍小吃と付添ままの役小立を侍らした心ななく心小劣り
與者大腰抜顔を見ふも穢らした立てうせふ女とも擲き出せ
出せと承るうきと重ねて何ともし今ん我誤を顧みて詞さく
立あうとあなく次へ出てゆく女も男も美はいら悲しくと泣
も泣ぬ候小袖を不ふ定められた母ぞあち始るま

○空起燈

却説八丁磔喜平次う後家良人志き記念大ニ即諸とも小往
日真鶴う寄小あひて不意王君兵衛佐どの小巡り合鳥帽子の
御用小立のこがげ母子が身のう人を活ら亡夫き喜平次が助氣の

御徳をほせし久大ニ郎小武士道の功を立させまはせし
 後ちん有雅き仰を義正何卒一箇の功小うて八丁礮の家名
 を起さんと千々小心を碎ととども原来女の身代われば何支も思
 ぬ小任せと其上男子といゆ七歳未滿の如きけまいしとせ
 んとまき道すいふの女を標を打捨用分の又九郎と流と云
 者のうへ連子の嫁入せし深き思案の有あまはし一口門辺を
 うろくと尋ふまはの二度壁飛脚と見へて内小の國統の
 色高や小用分の又九郎と流と云此家体小存まると申さるん
 とハ下総飛脚結城の油向屋うららるるは伏ひのあまを
 申た清取せと差出せ戒やと此方小覺のあま文御返吉又申
 たまは御飛脚の定宿何方があまと尋ねま御返吉又を志め
 さらるる明後日の晩方小うんとと取小まるとあると御渡りやたと
 念をつうて立飯まの跡見おつて門に寄件の一通封書をさく
 しく開き押載き讀返したる文章小遠ひも生血の連判のつ
 きも源氏の御味方小戒子も加もあ昔の武士八丁礮喜平次將
 大ニと書世に土肥弥太郎遠平殿の御情見へて奉ひ頼朝公の
 御前の首尾取給てまはし書に御深切是も偏不入道の
 御教りやとて御いそぐ間も小門口へ戻りかへ此家の主
 人用分の又九郎雪駄の音小それと心得早早く袂へさかく巻
 押隠し間もより色例まがら内入悪く戸を叩き昼日中小何れ
 門を叩きしと答うるきて即座の氣轉主の苗主より下鬼の長きハ
 大ニをつきて怪ひ小あま目のま肉のへ登盗人小草履行足を取

らきても世帯の毒と身の用心小うきで戸を共し置くと流石に又
 九郎は情か妻や少有て出じたる叔と其方小のい聞せて思小き
 さま一品ありと様子ありけし懐中より取出せりさうある硯
 其方も知ふ通じ此又九郎は流し一字一息いんはとやらいの字も知
 らね、今迄の硯きても長の年月まも関が済たまも其方へ嫁入
 て来じしと日毎の不自由を笑止小せり清水の舞臺より飛
 ふ心地して買て戻じ硯石の價ハ八錢仕う居て掛り一分四五厘の
 通用思ふも大美せり候まう墨筆の代錢ハ其方あて并まうじ
 又帳面まを拾ゆると必らと紙を買まうじ四五年公前のま
 掃小まく置障子紙密相籠小入て有と始末小の流し流し
 顔柿のさねとも呼まを女房に送らると是ハ花車ふる死硯筆

一、取扱うい軽めてはと一札述て硯石いさくまのふ薄情や以前
 の連判状決こをきて落ふわのる手早く拾ふ又九郎は流し南無三寶
 と思ども無筆を頼ふ口を記ていし扱んと高を括りたく胸を
 納り居ふ又九郎は流し目小角立憎き女の所為くる連添男小隠し
 包こ此書たふ物ハ何るふ哉有様小白状せると胸くる取責ふ小ぞ
 ありかたやうあつるふ咎めり横町の八百屋へ貸付し錢手形といせ
 果ど馬麻つくと見是が何国の錢手形そ人を目盲人小せんといせ
 其の汁畧小無ふべきう文字ハ瀆ねと胡乱る子澄摺ハ所ふ血の
 付たるが不審し白地小いといせんは先如斯と实例を
 竈の前より披さつと追取て背骨腰骨容撮るくとつははつ物
 音を此家の下児長吉が大三引連戻りかつて打驚きよ何と

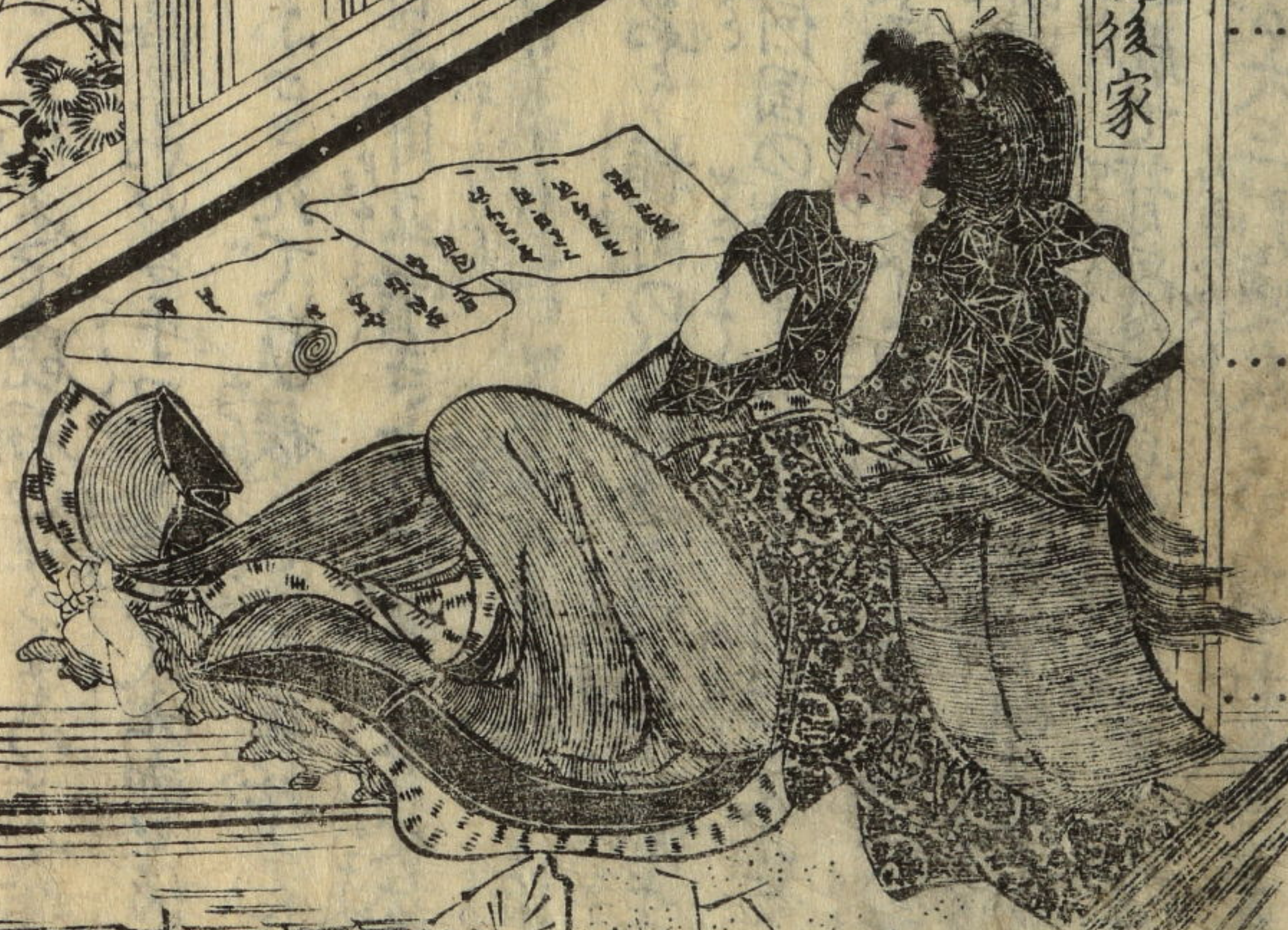
喜平次後家

誓書を

讀て

三人

志を



安達盛長



又九郎兵衛が腕小縫つて引もむる大三もつと泣き出て母を慰ませ小
 説言をさされぬぞ爺はあへて下されぬ女小取付押田か又九郎兵衛
 ハ猶齒起しに倚女め胴張り性強くいもどとも長吉が戻りけり最
 早胎より尋ねばお是を讀で見よとて兎金前へ投出と一通見せし
 と飛つて女房の鬢をかつくと引立て早く讀よと苛小そ何心なく長吉
 が取上て連判状ひき見ふるを仰天驚らふ四角四面の字に
 の寺おいなりにしゆへ一ツも讀じと紛らせに極し倚も同穴の狐よる親方
 を化さうと披きものを相伴せよと振上きハ嗚呼やと讀ませよ何小
 讀といふ早くとと云索厭状の力ある書面ひらけハ世房の物にふさ
 がふ一期の大夏長吉の書つくりのひのし色ふて天討起清文の夏つ
 其方とはと夫婦の解約致し夏此世におんる三世二世と半分の國

また又九郎兵衛おきり推量のおとと密夫小遠ひのめじ憎き徒に
 め用分の又九郎兵衛といわれ四も五も喰ぬ男をぬくと欺き三
 反二畝の田地を敷金の代りにしてあれなるか小鬼の面傷見ふ夏
 ながら嫁入て来らんといふふる合点納しと思へとも若又実定を
 らハ天夏しるに談合と思ひふくと呼介ハ我一生の不覺彼田
 地の美はいう成やと尋ねば今ハ村の庄屋年寄水論の出入最
 中由へ戴許相済次第小名前在切替人と有古又か一月くと相
 待最早二月おまるとの喰つふさき此方ハ不審く思へば嫁
 入て来じ其夜しる今日の今返り相違を踏さば解約の田地
 いふく埒り明さか時ハ去ころる合点ゆ其時の用分るさどと
 世間晴し又九郎兵衛女房密夫せしむるは其の一分立ちし其

起清の宛名いふんと何国の何者なるや因たしく所府に記しあふ
 ふや一字も残らば續くと思ふ處文盲も理を持詮及女房ハ一
 句の卷へともく長吉も差あつて誰の宛き宛名もあるに當
 然にして猶縁ハ猶もせり又九郎兵衛なりく讀よと迫借ら
 せて長吉も詮方にて當座の間小あひ起清の宛名いふと
 の寺子屋敷打の定右の岡も怒り氣も百倍し佛寺子屋
 敷立来らんかけ出せしが立戻り長吉佛が怒つまゝ合意し寺
 古屋へ行其跡めて此場をまといとせよとていふく男の顔立とと
 泣入母子を引立て傍小有あひ流繩りてくも巻小あめかゝる長吉
 倚も氣ふさいふと繩の相伴様するに丸大柱小くも付あれも心の用
 と寺子屋にしてかけへ行

卷之二 終



高木與曾藏書

會釋三浦與會

